

強者の戦略

京都大学の英語と言えは英文和訳と和文英訳がメインで、内容一致問題や空所補充問題はたまに出る程度、というのが 2000 年以降続く傾向なので、京都大学が今回紹介したような問題を出していたことに驚いた人もいます。ですが、京都大学もかつてはさまざまな形式の問題を出題していて、2014 年度のこのページではむしろ現在の東京大学っぽい京都大学の問題（1980 年）を紹介しています。

今回の問題は、設問形式だけを見れば現在の京都大学とはだいぶ趣を異にしていますが、選ばれた題材（John Barth (1956) *The Floating Opera*）の抽象度の高さはいかにも京都大学といった印象を覚えます。そして、英文を読み解く際に何に注意すれば良いかという、いわば英文解釈の「作法」は昔から変わっていないのだと感じます。

それでは、1 文ずつ本文を読み解きながら解答を確認してゆきましょう。

まずは、第 1 パラグラフから。

【第 1 パラグラフ 1 文目】

Quantitative changes suddenly become (1) qualitative changes.

〈訳〉量的変化は突如として質的变化になる。

いきなり 1 文目から下線部（1）が登場しています。指示は「“qualitative changes”と同じ内容の表現」を答えよというものでした。これは冒頭の文章なので、注目すべきは後続の文ということになります。英文の基本的な流れは「抽象から具体へ」ですから、“Quantitative changes”や“qualitative changes”が何を表すのかは後続の文から判断する他ありません。とは言え、quantitative（量的）と qualitative（質的）の対比関係は、強者たることを志す貴方にとっては基礎知識の筈です。そもそもこれらの語の意味が分からないのは論外ですので、あしからず。とは言うものの、この文を初めて読んだときの困惑は、これら 2 語を知っていたとしても（いや、知っているからこそ）拭い去ることはできないでしょう。そしてその困惑こそが、筆者自身が意図的に引き起こそうとしたものなのです。

それでは、困惑を引き起こす主張をした後に筆者は何を述べるでしょうか。困惑というのはわかりにくさから生じるのですから、よりわかりやすい説明を行うことになります。これが先に述べた「抽象から具体へ」の流れです。わかりやすい説明は、わかりにくさに困惑しているときに与えられることで、よりも強い感銘を読み手や聞き手に与えることができます（最初からわかりやすい説明をしてくれよ、と思うかもしれませんが、そうするとわかりやすいが故に聞き流されてしまうリスクが高まります）。

わかりやすい説明は、しばしば具体例を挙げることで行われます。この文の筆者も 3 つの例を挙げています。

強者の戦略

【第1パラグラフ2～4文目】

Water grows colder and colder and colder, and suddenly it's ice. The day grows darker and darker, and suddenly it's night. Man ages and ages, and suddenly he's dead.

〈訳〉(例えば)水はどんどん冷たくなってゆき、そして突如として氷になる。昼は次第に暗くなってゆき、突如として夜になる。人は次第に老いてゆき、突然死んでしまう。

水の温度低下(量的)が水から氷への状態変化(質的)をもたらし、空の明るさの変化(量的)が昼から夜への変化(質的)をもたらし、加齢(量的)が死(質的)をもたらす…これが、筆者の言う量的変化から質的变化への移行の具体例です。〈訳〉にはカッコ書きで(例えば)を追加していますが、話の流れから明らかに例示であることが推察できるので、そのアピールとして「例えば」と書くことも考えられるということです。

【第1パラグラフ5文目】

Differences in degree lead to differences in kind.

〈訳〉量の違いがやがて質の違いになるのである。

そして5文目は、2～4文目の例示から一般化された命題になっています。これは一見すると「抽象から具体へ」の流れに逆行しているようですが、そもそも具体というのは具体例だけではありません。長々とした説明を1文で簡潔にまとめることもまた、わかりやすさを高めることになります。つまり、英文の基本的流れをより正確に言うならば「抽象(わかりにくい)から具体(わかりやすい)へ」となるのです。この5文目は、2～4文目を簡潔にまとめた表現であるという意味ではこの流れに沿っていると言えます。そして、2～4文目は1文目の内容の具体例だったわけですから、1文目と5文目は実質的に同じことを言っていることになります。1文目の Quantitative changes (量的変化)は5文目では Differences in degree (量の違い)に、1文目の qualitative changes (質的变化)は differences in kind (質の違い)に読み替えられています。kindに「質」という意味があることは初耳だった人もいるかもしれませんが、これを機にしっかりと押さえておきましょう。

この時点で、(1)の解答は **differences in kind** で確定として良いでしょう。

第2パラグラフに移りましょう。

強者の戦略

【第2パラグラフ1文目】

All my life I'd been deciding that specific things had no intrinsic value—that things like money, honesty, strength, love, information, wisdom, even life, are not valuable in themselves, but only with reference to certain ends—and yet I'd never considered generalizing from those specific instances.

〈訳〉私は生涯を通じて、個々の事物には固有の価値などないのだと論断しようとし続けてきた。すなわち、お金や誠実さ、力、愛、情報、知恵、そして生命のような事物ですら、それ自体に価値があるのではなく、ある目的との関連においてのみ価値があるのだと論断しようとしてきたのである。だが、私はそれら個々の事例から一般化することは考慮してこなかった。

ダッシュ (—) やコンマ (,) が多用されているので流れが掴みにくかったと思いますが、〈訳〉は極力直読直解を心がけたものになっています。まずは最初のダッシュの手前まで、**All my life I'd been deciding that specific things had no intrinsic value** を見てみましょう。冒頭の **All my life** は副詞のカタマリで、**all one's life** (一生涯) を基本形で押さえておくといいでしょう。**decide** が完了進行形になっていることに違和感を覚えた人もいられるかもしれません。本来 **decide** は時間の幅をもたないので進行形はとらないのですが、その動作が何度も何度も繰り返されていることを表すときは進行形をとる場合があります。〈訳〉では **I've been deciding that ...** を「...と論断しようとし続けてきた」としましたが、「何度も論断しようとしてきた」としてもいいでしょう。**that specific things had no intrinsic value** (個々の事物には固有の価値などない) には、ダッシュの後に具体的説明が続いています。**that things like ... are not valuable in themselves, but only with reference to certain ends** がそれに当たります。この箇所で見逃すべきは、**not A but B** (A でなく B) が組み込まれている点でしょう。特に **but only with reference to ...** の訳出の際に **valuable** を補って「...との関連においてのみ**価値がある**」と訳すようにしましょう。というのも、**not A but B** の枠組みで捉えるならば A に **valuable in themselves** が入り、B に **only with reference to ...** が入ることになりますが、それだと A と B が文法上対等とは言えないからです。平たく言えば、A には形容詞 **valuable** があるのに B には対応する形容詞がないのはおかしいということです。文法上対等というのは同じ品詞、同じ構造をもつということなので、B にも **valuable** に対応する形容詞を補わないといけません。そして英語では同語反復は（前後の文脈から復元可能な場合は）省略するのが一般的なので、**valuable** を補うのが自然でしょう。ここまで読み進めた時点で再びダッシュが登場していますが、これは最初のダッシュから始まった具体的説明の終点を表しています。なので、**and I'd never considered generalizing from ...** は冒頭の **I'd been deciding ...** と並列関係にあると考える必要があります。今回は和訳問題ではありませんが、訳出する際には「私は事物に固有の価値などないのだと論断しようとし続けてきた (**I'd been deciding ...**) が、個々の事例から一般化することを考慮してこなかった (**I'd never considering ...**)」という並列関係が明示されるような訳出を心がけましょう。

ところで、最後の「それら個々の事例から一般化することは考慮してこなかった」とは一体どういうことなのでしょう。その答えは第1パラグラフにあります。水から氷、昼から夜、生から死という変化の事例

強者の戦略

を一般化して、量的変化は質的变化へと変わるという一般化を筆者は行っています。その作業を以前の筆者は行っていなかったということなのです。だから、この文の時制は I'd been deciding... も I'd never considering ... も過去完了形になっていたのです。過去完了形はある過去の時点よりも前の出来事を表します。では、その「ある過去の時点」とは一体いつのことなのでしょう。ここまでに書かれていなかったのなら、後続の文にその答えがある筈です。

【第2パラグラフ2文目】

But one instance was added to another, and another to that, and suddenly ⁽²⁾the total realization was effected—nothing is valuable in itself; the value of everything is attributed to it, assigned to it, from outside, by people.

〈訳〉しかし、ひとつの事例が別の事例に加わり、そしてまた別の事例が加わり、そして突如として完全な理解に至ったのだ。すなわち、それ自体において価値あるものなど存在せず、あらゆるものの価値は人間によって外部から帰せられ、付与されるのだ、と。

この文が、「ある過去の時点」において起きた「個々の事例からの一般化」を表しています。後半の nothing is valuable in itself は1文目の specific things had no intrinsic value とほぼ同義ですが、2文目におけるそれは個々の事例から一般化されているので、1文目のそれよりも強い説得力をもっていることとなります。

ここまで正しく把握できていれば、(2)の問いである「“the total realization”の基盤となった考え方が、最も簡潔に表現されている箇所」を答えることができるでしょう。the total realization の基盤となっているのは、まだ一般化されていない(that) specific things had no intrinsic value となります。

第3パラグラフを見てみましょう。

【第3パラグラフ1文目】

I must confess to feeling in my tranquil way some real excitement at the idea.

〈訳〉私は物静かに思考する中で、この考えに対してある種の本当の興奮を覚えていたことを告白しなければならない。

tranquil (静かな、穏やかな) と real excitement (本当の興奮) に対比的になっているので、訳すときはこの対比を活かせるよう工夫が必要でしょう。the idea は前パラグラフ最終文の nothing is valuable in itself を指すと考えられます。

強者の戦略

【第3パラグラフ2文目】

Doubtless (as I later learned) this idea was not original with me, but it was completely new to me, and I delighted in it like a child turned loose outdoors for the first time, full of scornful pity for those still inside.

〈訳〉 もちろん（後に知ったことではあるが）この着想は私の独創ではなかったが、それは私にとって全く初めてのもので、この着想を得て歓喜したのだった。それはまるで、初めて戸外に放たれた子供が未だに戸内にいる連中に対し軽蔑に満ちた哀れみをいっぱいに感じているかのように。

Doubtless は副詞で「確かに、なるほど」という譲歩を導く働きがあります。this idea was not original with me が譲歩で、後続の but 以下が筆者にとってメインの主張になります。like a child ...は私の歓喜ぶりを比喩的に説明したのですが、日本語として自然な訳出をしようとすると工夫が必要になってきます。〈訳〉はその一例に過ぎませんので、自分ならどう訳すかをぜひ考えてみてください。

【第3パラグラフ3文目】

Nothing is valuable in itself.

〈訳〉 それ自体に価値のあるものなど何もないのだ。

3文目で、再び this idea の中身である Nothing is valuable in itself が提示されています。本来、同語反復を好まない英語で同じ文が繰り返されることは、よほどへたくそな書き手でないかぎり滅多にありません。但し、文章全体の鍵を握る重要な文である場合、敢えて同じ文を繰り返すことがあります。もちろん、今回は後者のケースになります。

【第3パラグラフ4文目】

Not even truth; not even ⁽³⁾this truth.

〈訳〉 真理ですら価値はない。この真理すらも。

文法的に注意が必要な点としては、Not even truth; は一見文として成立していません。後ろに続く not even this truth も同様です。これらは元々 even truth is not valuable / even this truth is not valuable という形だったのですが、直前の Nothing is valuable と同語反復になっている is valuable を省略することで本文のような形になったものです。〈訳〉が「真理ですら価値はない。この真理すらも。」となっているのは、その名残を表現するためです。

(3) の問題は、「“this truth”の内容を表している文」を答えよというものでした。もちろん話の流れから答えが **Nothing is valuable in itself.**だと判断できたと思いますが、より手堅く行くならば、this の指示対象は原則として1文前までであることを思い出しましょう。そうすると、Nothing is valuable in itself.よりも前の文章を探す必要がないことが分かります。

第4パラグラフに行きましょう。

強者の戦略

【第4パラグラフ1文目】

On that morning I had opened my eyes with the resolution that I would destroy myself; here the day was half spent, and a premise was springing to my mind, to justify on philosophical grounds what had been (4)a purely personal decision.

〈訳〉 その日の朝、私は自殺しようという決意を胸に抱いて目を開けた。そしてその日が半ば過ぎるうちに、ある前提が私の心に生じつつあった。その前提は、完全に個人的な決意だったものを哲学的根拠に基づいて正当化するものだった。

Nothing is valuable in itself.と公言している辺りから怪しい感じがしていましたが、ついに筆者は destroy oneself (自殺する) と言い出してしまいました。ともかく話を読み進めてゆくと、ある前提 (a premise) が登場し、その前提の働きは to justify ...によって説明されています。この premise と to justify ...の関係は同格関係 (名詞+to V) のようにも見えます。もしそうなら premise の内容が to justify ...になりますが、内容的にその可能性は排除して良いでしょう。premise が to justify の意味上の主語になる、一般的な不定詞形容詞的用法だと考えることにしましょう。to justify 以下の構造把握は大丈夫でしょうか。justify は justify A 「Aを正当化する」が基本形なので、この文の場合は、to justify(v) ... what had been a purely personal decision(o) (完全に個人的な決意だったものを正当化する) という構造になります。on philosophical grounds は justify を修飾する前置詞句になります。

(4) の問題は、「“a purely personal decision”の内容を述べている箇所」を答えよというものでした。この文はパラグラフの冒頭なので、この文の中から指示対象を探せば良いでしょう。最大のヒントは decision です。resolution が decision と同義であることに気付けば、the resolution と同格関係にある **that I would destroy myself** が答えだと分かるでしょう。もちろん、purely personal (完全に個人的な) から destroy myself に結びつけることも可能でしょうが、それは destroy oneself (自殺する) というフレーズの意味を知っていればの話です。いずれにせよ、高度な語彙力が必要とされる問題です。

ところで、このパラグラフに入ってから a premise の中身が登場していないようですが、どのような前提なのか分かったでしょうか。その答えは、2文目にあります。

【第4パラグラフ2文目】

To realize that nothing is intrinsically valuable had such an overwhelming effect.

〈訳〉 本質的に価値あるものなど何もないと気付くことには実に圧倒的な効果があった。

1文目に a premise was springing to my mind (ある前提が私の心に生じつつあった) とありましたが、2文目では To realize that ... (...と気付くこと) とパラフレーズされています。その中身は nothing is intrinsically valuable。これだけ同趣旨の発言が繰り返されていると、筆者の執念めいた思いすら感じられる気がしますね。

強者の戦略

しかし、3文目で筆者のさらなる捻りが入ります。

【第4パラグラフ3文目】

But if one goes no further and destroys oneself ⁽⁵⁾on principle, one hasn't reasoned completely.

〈訳〉しかし、もし人がこれ以上先に思考を進めることなく原理原則に基づいて自殺するなら、人は思考をし尽くしたことはないだろう。

一見何の変哲もない文のようですが、そもそも goes on (進める) とはどういう意味なのか、principle とは何を指すのか、なぜこの文から動詞が現在形 (現在完了形) なのか、といった点が引っかかります。goes on については、帰結節の one hasn't reasoned completely との対応を考えると reason (思考する) とほぼ同義と考えられます。〈訳〉で「思考を進める」と訳出しているのはそのためです。on principle は (5) の問題と関係してきます。「“on principle”と同じ内容の表現」を答えよというものですが、destroys oneself にかかる表現であることから、第4パラグラフ1文目の存在を思い出せたかどうかポイントです。a premise ... to justify on philosophical grounds what had been a purely personal decision (完全に個人的な決意だったものを哲学的根拠に基づいて正当化する前提) の on philosophical grounds が正解となります。a purely personal decision が the resolution that I would destroy myself を意味することが分かっていたら見つけるのは容易だった筈です。

最後の、なぜこの文が現在形 (現在完了形) なのかという点は後続の文にも、そして第1パラグラフにも絡んできます。

【第4パラグラフ4・5文目】

The truth is that nothing makes any difference, including that truth. Hamlet's question “to be or not to be” is absolutely meaningless.

〈訳〉事の真相は、あの真実も含めて、何らかの違いをもたらすようなものなど何もないということなのだ。「生きるべきか、死ぬべきか」というハムレットの問いは絶対的に無意味なのだ。

第2パラグラフから第4パラグラフ2文目までは、筆者の経験した過去のエピソードになっていました。ですが、第1パラグラフと第4パラグラフ3～5文目は一般論 (と筆者が考えるもの) になっているため、動詞が現在形ないし現在完了形になっています。このような動詞の形によるニュアンスの違いを読み解かせる問題は2000年以降の京都大学入試においても何度か出題されていますので、動詞の形に対する意識は高く持つておくようにしましょう。

そしてもうひとつ、このように文章内で時系列が行ったり来たりするような文体は論説文よりも小説に多く見られるということをぜひ覚えておいて下さい。

強者の戦略

【さいごに】

この文章を読み通してみても、貴方は筆者の議論に賛同することができたでしょうか。「賛同するどころか全く納得いかないよ！」と言いたくなった人もいると思います。かく言う私もそのひとりです。その原因としては、この文章が前後の文脈が分からないまま抜き出されていること、そして実はこの文章が小説の一節だということが考えられます（作品名をインターネットで検索すると概要を知ることが出来ます。英語サイトですが…）。小説は論説文とは異なり、論証や説得が主たる目的ではありません。論説文はそもそも筆者の見解を読者が受け入れることを目的としているので、説得力に欠ける論説文に価値はありません。ですが、小説は違います。その作品が説得的であるか否かよりもその作品に共感できるか否かの方が、作品の評価に影響を与えることが少なくありません。この文の筆者（正確には主人公）は「価値あるものは何もない」とうそぶいて自殺しようとするほどニヒリズムに毒されていますが、「価値あるものは何もない」というテーゼすらも無価値だと断じている辺りから論理が完全に破綻しています。もしこれが論説文であれば「荒唐無稽ですね」と一刀両断されて終わりだったかもしれません（論証めいた第1パラグラフですら説得的とは言いがたいです）。ですが、このような評価を小説に対して下すのは無粋というものでしょう。ですから、京都大学はこの文章を素材に問題を作成するに当たり、文章の内容に踏み込むのではなく下線部の対応表現を答えさせるという客観式を選んだのでしょう。ただ、今後導入される特色入試の中では、例えば小論文やディスカッションの素材としてこのような議論の余地のある題材が選ばれるかもしれません。与えられた文章を読み解くだけの受け身のやり方では混乱してしまう文章にいかに取り組むか、それに対する貴方なりの答えを用意しておく必要があるでしょう。

それでは、今回はここまで。また次回お会いしましょう。